

市民活躍・地域コミュニティ活性化特別委員会行政視察概要

1 視察月日 令和7年11月11日（火）～11月12日（水）

2 視察先及び視察事項

（1）兵庫県神戸市

K I I T Oでのつながり再構築に向けた地域支援について

（2）公立大学法人大阪

つながりが生み出すイノベーション・サードセクターと創発する地域について

3 視察委員

委 員 齊 藤 伸 一

委 員 竹 内 康 洋

視察概要

1 視察先

兵庫県神戸市

2 視察月日

11月11日（火）

3 対応者

企画調整局大学・教育推進連携課長（挨拶）

デザイン・クリエイティブセンター神戸センター長（説明）

デザイン・クリエイティブセンター神戸シニアマネージャー（説明）

4 視察内容

（1）K I I T Oでのつながり再構築に向けた地域支援について

ア K I I T O設立の背景

神戸市は、開港以降異国文化をまちづくりに取り入れてきたことや、震災からの復興を市民の力で成し遂げたことなど、神戸の豊かな創造力が評価され、ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン都市として認定されている。また、神戸の魅力は人であるという思いを集約した「B E K O B E（ビーコウベ）」を神戸市のシビックプライド・メッセージとしており、神戸市の土壌に根つき様々な活動が行われている。

デザイン・クリエイティブセンター神戸は、デザイン都市・神戸の創造と交流の拠点として、旧神戸生糸検査所を改修し、2012年8月に開館した。かつて輸出生糸の品質検査を行っていた建物の歴史からK I I T Oの愛称で呼ばれている。

館内には貸しホール、ギャラリー、会議室やオフィス入居スペース等があり、アーティストやデザイナーだけでなく、様々な人や世代が交流し、そこから生まれるアイデアや工夫で社会的な課題を解決し、新しい神戸をつくるための創造性の発信の中心地になっている。

イ つながり再構築に向けた地域支援

K I I T Oでの取組は、ちびっこうべ、B E K O B E、男・本気のパン教室、チャイケモチャリティマルシェ、d a t e . K O B Eプロジェクト、ふれあいオープン喫茶や仮設のピザ窯のある公園

など、たくさんのプロジェクトが生まれ、そこに多くの人たちが関わり、様々な化学反応を起こしながら発芽し根を張り育っている。神戸で暮らす人、働く人、子供、若者や大人たち、全ての人が集まり、話し、次々に何かを生みだしていく場所として、デザイン・クリエイティブセンター神戸が位置づけられている。その実践が積み重なれば、自分の街への愛着が増し、街そのものにも個性が生まれ、やがては神戸の経済もより元気になることができる。人がクリエイティブになり、街がクリエイティブになることで地域のつながりへとつながっていく。

ウ K I I T O の活動理念

活動理念（フィロソフィー）は、土、風、水、そして種の4つの要因が関わっている。この基本理念は、地域活動やまちづくり活動の支援を行う際に、3つの立場として土、風、水が必要であるとし、それぞれ担うべき役割があり、地域の人たちがお互い仲良く、生き生き暮らす元気なまちになる地域豊穰化のためには、種として位置づけている強度のある活動が必要になる。

土の人は、土のように動かない存在として、そこに居続ける存在で地域住民を表している。そして活動である種は、昔から地域にある様々な祭り、餅つきや防災訓練等の活動を表している。高度経済成長期以前は、地域住民を示す土が豊かだった。コミュニティが豊かで、土にも養分がしっかり含まれた状態であり、土が豊かであれば、どんな種（活動）を植えても自然に芽が出て、根を張り、成長し果実を実らせ、種を落とし、また芽が出る。種（活動）は、誰の力を借りなくても自己完成的に機能し続けることができていた。

しかし、現代は土が枯れてしまい、水分も養分も含んでいない状態とし、地域コミュニティが希薄で、倒壊している地域も多くなっている。長年の自生していた種（活動）も立ち行かなくなってしまう、芽がない、根を張らないという、誰も手伝わない、参加しないという状況に陥り、その状況が長く続けば種（活動）はいずれなくなってしまう。そして、地域から祭りや餅つきが姿を消してしまうため、その危機的な状況を打破する救世主として期待されるのが風の人と考えている。

風の役割は、乾いた土で芽が出なくなった古い種を品種改良して強い種として、風に乗せていろいろな地域に紹介していくことを役割としており、地域に住んではいないが、専門家として、外から強

い種をつくれる存在を、社会は求めている。日本のあらゆる地域が風の人欠乏症で、強い種を切望している。しかし、風の方は強い種を携えて紹介を行うが、その地域に留まり、支援をし続け、その成長を見守ることはできない外の人としているため、風が運んできた強い種に水をやって育ててくれるサポート役が必要になっている。それが水の人として地域愛にあふれ、地域活動をしているまちの応援団を示している。

具体的には、町内会、PTA、NPO等のメンバー、自治体の職員やボランティアの大学生などで、多様な水の人が地域には存在し、活動を行っている。多くの地域や社会が、水はいるが風がない、強い種がないといった切実な課題を抱えている。こうした状況を踏まえて、K I I T Oがやるべきことは、風の人を育てることであり、風の方のスキルである強い種をつくり方を、多くの水の人に伝授することではないかと考え活動を展開している。

エ 質疑概要

Q 地域を豊かにするキーワードは何か。

A 人は楽しい所に集まってくるため、地域の活動を部活動に例えれば活動拠点は部室とし、つなぐ人はマネージャーで趣味から活動へつながる。本気、本物、かっこいい、クオリティを育てる視点が大切と感じている。

Q 種として生まれた地域活動の事例はあるか。

A 長田区の神楽公園に、高校の生徒も参加してバスケットゴールを設置し、神戸初の高校生による公園管理会を結成した長田区バスケットゴールプロジェクトがある。このほか、神戸市内の複数の大学が地域連携センターやそれに類する組織を設置し、地域課題の解決に積極的に取り組んでいる。また商店街の特性を生かした遊び場の設置も行っている。

Q 地域の若い世代へのアプローチ事例はあるのか。

A 地域の中学生がジュニア防災リーダーとして活躍し、防災をテーマとした総合学習の成果の発表を行っている。自主防災組織、防災士会や市民ボランティアに加え、地元大学生や中学生の総勢85名で、地域のみんなでつくるイザ！カエルキャラバンを実施している。

(2) 委員所見

神戸市は「B E K O B E (ビーコウベ)」をシビックプライド・

メッセージとしており、このことが神戸の土壌に根付き諸活動が行われている。

本市には多様な、横浜を愛する多くの「ハマっ子」がおり、先人から現在まで多様な市民力も培っていたことは、類をみないほどの大変に大きな財産となっている。本委員会の調査・研究テーマである「誰もが居場所と役割を持ち、いきいきと生涯活躍できるまちづくりやコミュニティの活性化」に関することの視点から、今一度、横浜を見つめ続けたいと思う。



(K I I T O施設内にて)



(会議室にて説明聴取)



(K I I T O入口にて)

視察概要

1 視察先

公立大学法人大阪

2 視察月日

11月12日（水）

3 対応者

大阪公立大学大学院准教授（挨拶・説明）

4 視察内容

（1）つながりが生み出すイノベーション・サードセクターと創発する地域について

ア 大阪公立大学の森之宮キャンパス

大阪公立大学の森之宮キャンパスは、良好な交通アクセスかつ大阪の東西都市軸の東部、森之宮に立地するメインキャンパスであり、「知の森」としてイノベーション・コアを牽引する重要拠点として2025年9月に開設された。

イ 地域課題に対応するつながりネットワーク

やっかいな問題は、みんなで解くネットワークを可視化するという視点がある。2011年の東日本大震災において、サードセクターがやっかいな問題に対応してきたと言われており、ある調査でリストアップできただけでも約1400以上の組織が、震災で生じた様々な社会課題に対応した。その活発さや効果は被災地の中でも地域差があり、それは社会ネットワーク、人と人のつながりが、重要な要因となっている。

独自のサードセクターの社会ネットワークの分析では、その構造は震災前から「べき乗則」が当てはまり、スケールフリー・ネットワークであった。べき乗則とは、地震の規模と発生頻度の分布、収入の分布、人口規模別の都市数の分布など、ごく僅かな大規模なもの、その他多くの小規模なものからなり、様々な自然現象に見られる分布特性であったとされる。ほとんどの人は一人からしか指名されていないが、ごくたまにたくさんの人から指名される人がいて、ほんの一握りの人が多くの人から信頼され、ネットワークのハブとなって様々な情報をやりとりする中継点となっていた。

ネットワークのハブとなる人物は、やっかいな問題を扱う際、セクターや組織を超えて形成されたネットワークを通じて、問題を明確化するとともに解決のための知識や資源を動員する。ネットワークというメカニズムは、ハブとなる人物を通じてやっかいな問題にアプローチし、解決を生み出すことができるため、解決策の生み出し方のパターンが一般的なものだとの認識が、現在の社会にない。

そのため別のパターンを採用し、ネットワークというメカニズムを働かせるのに重要なのはハブとなる人物である。ネットワークという解決パターンを社会実装するために最も重要なことは、ネットワークの要となるハブ、つまり人と人をつなぐ人の取扱いを変えることであり、言葉を変えるならばハブをプロとして理解し取り扱うことが大切である。

ハブとなる人物は、優秀なコーディネーター、優秀なプログラムオフィサー、優秀なロビイスト、優秀なCSR担当者や優秀なリサーチ・アドミニストレーター等として社会に存在している。高等教育機関や政府においても、このような人物を育てようという試みの機運が上がってきている。しかし、まだ階級組織や市場で求められる人物ほどには、育て方や組織における位置づけ方等、ネットワークのハブの扱い方を理解できていない。この数十年、やっかいな問題として試され続けているが、効果的な解決の糸口はここにあると考える。

ウ 質疑概要

Q 災害時における共助は、地域のつながりに密接に関わると思うがどのようなになっているのか。

A 社会的課題としての災害の特徴は、ある地域にたまにしか来ない。平時に民間が関与している領域に、行政が加われないこと等の供給面で混乱する。地域や個別世帯のケースデータの蓄積をもとに、官・民・平時・災害時に支援を組み合わせる。まさに、平時のネットワークを可視化することが重要である。

Q ネットワークをハブとしてつむぐ人とは、どのような人か。

A 人とのつながりをすごく大切にして、行った先々で、必要なことを実現してくれる人をアシストし、信頼形成コストがいない人だと認識している。事案の状況をマクロに捉えてミクロな部分に陰から働きかけて、自らの利害への執着のなさや他者への利害を想像し通訳することで、様々な調整を実施している人。ネット

ワークというメカニズムを働かせる最重要因子はハブとなる人物である。人と人をつなぐ取扱いを変えることをできる人やハブをプロとして理解し取り扱うことが必要としている。

(2) 委員所見

本市の多様な市民力、ネットワークをつむぐ、人と人をつなぐ人の作用やネットワークを可視化する。課題先進都市ともいえる横浜には、多くの横浜を愛して行動する人がいる。ネットワークを可視化し、コーディネートする人が重要であり、また、地域におけるコーディネートをする人を束ねてコーディネートする、マネジメント機能を考える必要性を感じた。



(森之宮キャンパスにて)



(大学院准教授と森之宮キャンパスにて)